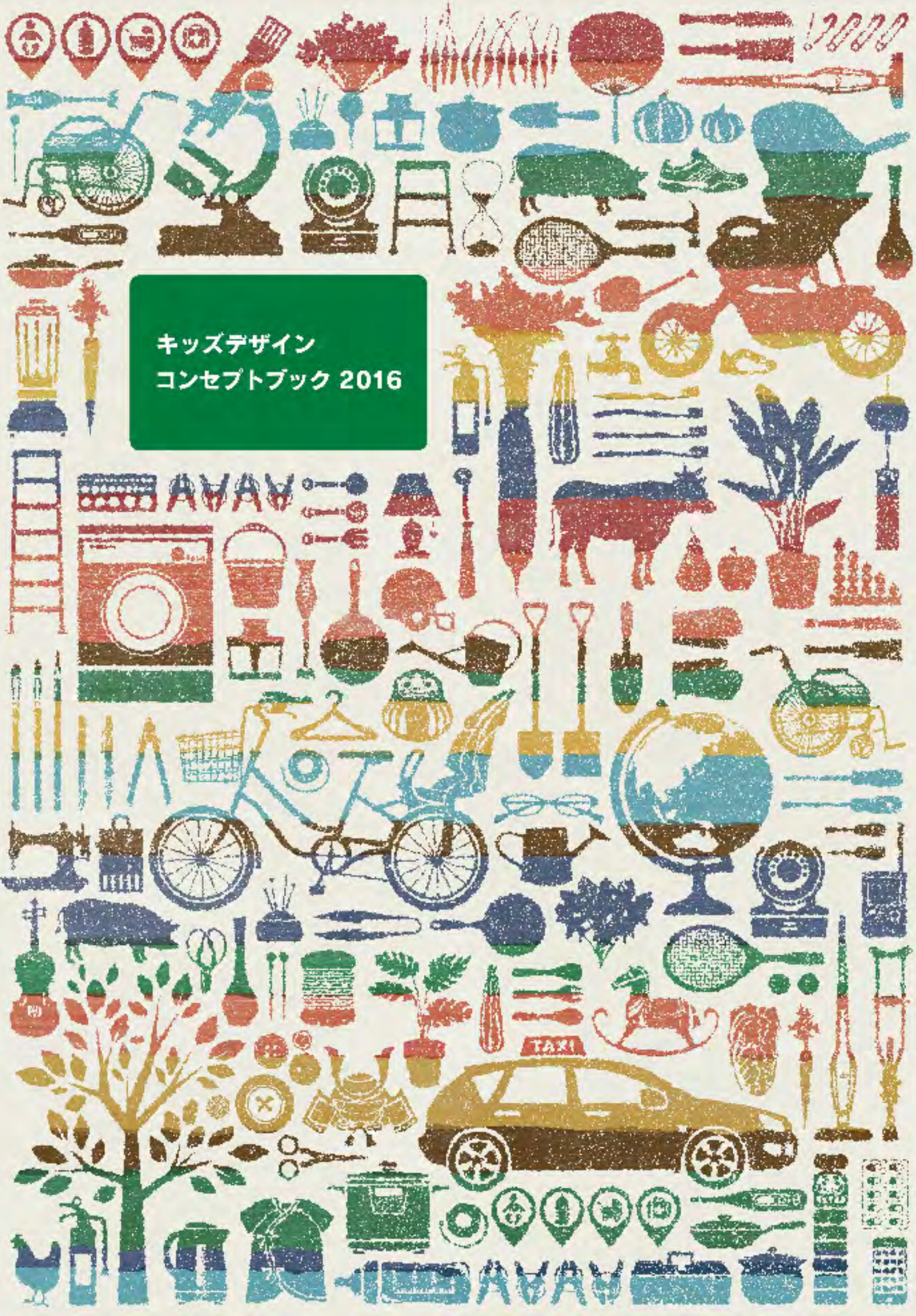
キッズデザイン
コンセプトブック 2016



今よりももっと
子どもが輝く未来のために

私たちはみな、かつて子どもだった
野山を走り、森を遊具にして、日が沈むまで夢中で遊んだ
土と石と木、昆虫や植物に触れることが日常だった
あの感触は、まだこの手のなかに残っている気がする

いにしえの知恵が、夢や創造力をかき立てる
懐かしさから見えてくる未来もある
その素晴らしさや楽しさを知っているのは
いまここにいる、子どもたちだけだ

かけがえのない子どもたちの笑顔は
時代は移り変わっても、変わることはない
変わってはいけないものを守り続けるため
10年目を迎えた今、私たちは再び歩んでいく

「第10回キッズデザイン賞」に寄せて

「キッズデザイン賞」が、10周年を迎えられたことを、心からお祝い申し上げます。

５００を超える過去最多の応募の中で、今年度の内閣総理大臣賞は、
風の強い高台に建てられた幼稚園における「里山教育」の試みが受賞しました。
木で造られた自然換気の教室で学び、周囲に広がる野山を駆け巡ることを通じて、
子どもたちに自然を体感させ、好奇心や想像力を育む取組です。

この他にも、今年度の受賞作品には、
親子が地域で防災を学ぶ仕掛けづくり、環境と金融の関係を考える情報誌、
シニア世代による子育てを助ける製品、育児休業中の親同士の交流を深める取組など、
子ども、子育てを支える多種多様なデザインがあります。

安倍政権は、未来を担う子どもたちへの投資を拡大し、
すべての子どもが夢に向かって頑張ることができる社会を目指します。
子どもたちの感性や創造性を豊かにし、
親たちが安心して子どもを産み、育てられる社会づくりを支えられるよう、
キッズデザイン賞が今後も一層大きな役割を果たすことを期待しています。

平成28年8月29日
内閣総理大臣　安倍晋三

安倍晋三

はじめに

～子どもと子育てが輝く国を目指して

特定非営利活動法人キッズデザイン協議会は今年で創立10年を迎えました。
合わせてキッズデザイン賞も10回を数えます。
これまでご支援、ご協力をいただいたすべての方のご厚情に厚く御礼申し上げます。

記念すべき「キッズデザインコンセプトブック２０１６」は、
この期間を振り返りつつ、
次の10年へ向けての課題と目標を考えていく内容となりました。
第10回キッズデザイン賞は、初めて５００点を超える応募をいただき、
２９７点が受賞されました。新設された「東京都知事賞」は、
子どもの安全安心への配慮がある優れた作品に与えられます。

来たる10年へ向け、
社会を構成するすべての方々と共にキッズデザインの活動を推進させ、
子どもと子育てに最も優しい国・日本を実現していきたいと考えています。

２０１６年11月
特定非営利活動法人　キッズデザイン協議会

CONTENTS

6 キッズデザイン、これまでの10年、これからの10年
8 10年の足跡
12 キッズデザインが築いてきたもの、取り組むべきこと
16 キッズデザイン10年へ寄せて
20 キッズデザイン開発ストーリー ２０１６
31 第10回キッズデザイン賞 最優秀賞
優秀賞
奨励賞
特別賞
55 第10回キッズデザイン賞 受賞作品
109 受賞団体名索引
111 第10回キッズデザイン賞 概要
114 キッズデザイン協議会 活動紹介

キッズデザイン、これまでの10年、これからの10年

2006年5月、キッズデザイン協議会は産声をあげた。発足当時生まれた子どもは、今年でもう小学校4年生になる。10年という歳月は子どもを取り巻く環境にどのような変化をもたらしてきたのだろうか。時代の変遷とともにキッズデザインが歩んできた道程を振り返り、次の10年で取り組むべき目標を考える。

KIDS
DESIGN
AWARD

子どもの不慮の事故防止へ向けて

子どもの死亡原因の上位には常に「不慮の事故」が挙がってきた。子どもの重篤な事故は、同じ原因で繰り返し起こる。しかし、その件数自体は少なく、個々の企業が事故から学習して製品・サービスづくりに活かす機会は限られる。事故を減らすためには産業界全体で原因を共有できる場が必要――キッズデザイン協議会設立の大きな目的のひとつはこれであった。加えて、事故は、子どもならではの行動特性によって安全なはずの製品・サービスが、組み合わさることで起こる。業種を越えた横断的な取組が求められる。

安全はそれが体験できない上、効用をすぐには実感できない。そのため価値の訴求が難しい。エコロジーがそうであったように、産業界が足並みをそろえて価値を訴求していく必要がある。これが実現できれば、「常に子どもの安全を考える」という日本の産業界全体の安全ブランドが差別化のポイントとなり、企業の業績にも貢献するだろう。

2006年、9歳以下の子どもの不慮の事故による死亡数は523人であった。特に1～9歳では死因の第1位であった。だが、「平成27年 人口動態統計」では177人とその数は確実に減少し、第2位へと下がっている。とはいえ、依然としてまだこれだけの数の子どもが犠牲となっている現状もある。

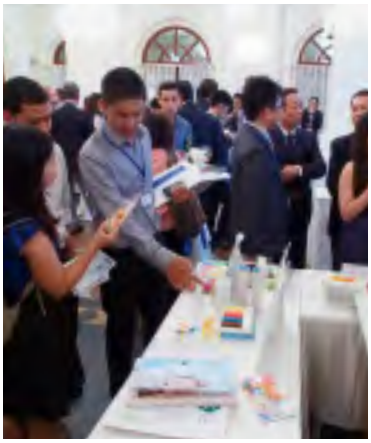
キッズデザイン賞の受賞作は2000点を超え、子どもの安全に資するものづくり、ことづくりに真摯に取り組む多くの優良例を社会へ周知することができた。CSD（Child Safety though Design）認証、子どもの安全設計の指針のJIS化など標準化も進みつつある。

重要な点はキッズデザインという価値をガラパゴス化しないことである。少子化に直面するアジア諸国を始めとして、日本発の新たな価値は世界の子どもを救える普遍的なものだ。社会を挙げて子どもの重篤な事故減少に努め、世界にアピールしていくべきであろう。

創造性育成の環境づくり、そして震災復興

未来を担う子どもたちのための環境づくりのテーマは安全安心に留まらない。キッズデザイン協議会では創造性育成や子育て支援に関するデザイン指針の策定にも取り組み始めている。さらに海外での展示会へも出展するなどその活動の幅を広げている。キッズデザインは、「クールジャパン」という戦略的産業政策の一翼を担うものであり、今後の日本の成長のカギを握る一つと考えている。

２０１１年３月11日、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした未曾有の大地震は、死者・行方不明者合わせて１８０００人という、痛ましい震災となった。十代以下の子どもも７００人を超える犠牲者が出たとされている。子どもやその家族を含め、被災地の方々の心情は察するに余りある。



ベトナム展示会

すぐに全国、全世界規模で復興へ向けた取組が始まった。キッズデザイン協議会でも、会員企業を中心に様々な復興支援プランを被災地の自治体とともに社会に提言し、具体的アクションとして、同年４月には企業中心に広く声を掛け、支援物資の送付を、10月からは子どもたちへの元気と笑顔を届ける応援活動や体験型のワークショップの開催を行う元気プロジェクトを開始し、現在も継続して実施している。

子どもたちの元気プロジェクト

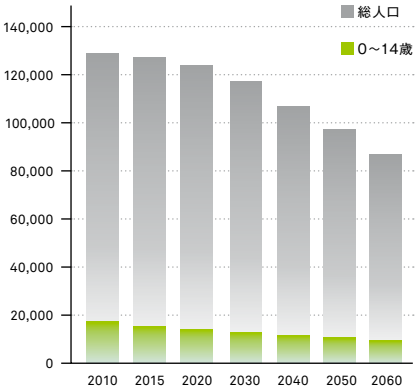
子育てを取り巻く状況といかに対峙するのか

日本の総人口は、この10年間で８００万人減少し、２０３０年には1億１６６２万人、２０４８年には1億人を割り、２０６０年には８７００万人弱になるとの予測もある。（図１）

人口を保つための出生率は２·０７といわれ、1億人を下回らないためには、２０３２年までにこの数値を達成する必要がある。だが有史以来、短期間でこれほどの出生率の改善をみた先進国は存在しない。スウェーデンやオランダなど出生率回復に成功した国でも、出産・保育政策を打ち出しながら20年かかっているのである。人口減少の克服に向け、政府は合計特殊出生率を２０２０年代半ばまでに1.8程度まで引き上げる目標を掲げた。

育児をする女性の働き方の多様化とともに保育ニーズも多様化しているが、現在の保育の仕組みはまだその変化に対応しきれていない。さらに待機児童問題ばかりが注目されがちだが、深刻な若年層の減少に直面する地方では、子育ての孤立化、子どもどうしの交流や集団生活の機会が確保できないという大きな問題も存在している。

専業主婦は、一人の時間が持てないことや周りに話し相手がいないこと、社会から取り残されているような焦燥感、といった不安や悩みを抱える。一方で働く母親は、仕事と子育ての両立の負担に悩む。妊娠がわかった瞬間から保育所探しに奔走し、育児休業を早目に切り上げての復職、その後には「小1の壁」問題も立ちはだかる。現状の問題点を是正し、時代の変化に対応した新たな保育制度を構築し、かつ量的拡大を急ぐ必要がある。子育ての問題は常に社会的、経済的背景と深く関わっている。解決のためには、家庭、地域、企業、保育関係が補完的な関係を持ちながら、新たなトレードオフが起こらない「第三の解」が必要である。キッズデザインはそのプラットフォームになり得る、唯一の活動体であると信じている。



（図１）
国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より

東京ゆりかご幼稚園

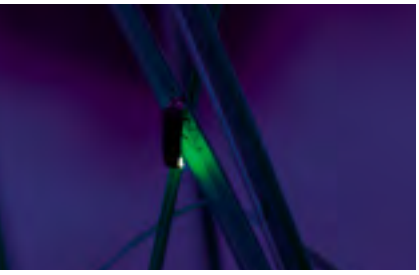
10年の足跡

キッズデザインの活動がたどった10年間を社会のできごとと共に年表で見る。

生活者、企業、自治体、省庁、研究機関、学校、病院など
多様なステークホルダーの参画で
キッズデザイン協議会は成り立っている。
子ども・子育てが日本において社会的課題と
取り上げられたのは、
1990年の「1・57ショック」の頃からであり、
以降、さまざまな施策が進められてきた。
子ども・子育ての問題は、
暮らし方や働き方の変化、都市と地方の関係、
そして生活者心理と切り離すことはできない。
協議会の活動や各年の受賞作は
その時代背景が色濃く、反映されている。
取り組むべき課題やテーマはさらに多くある。
さらに幅広い企業、組織、地域の参画を心から望んでいる。

キッズデザイン賞受賞作品

＜第2回＞


学研ほたるキャンペーン

安全な子ども環境への取り組み

＜第1回＞

ウィル スリー（スプーン／フォーク）

衣服内温度計「らん's ナイト」

キンダーマーカーたふっこ

ドクターベッタ哺乳びん

社会の出来事

2008年

後期高齢者医療制度開始
日本でiPhone発売
リーマンショック（世界金融危機）発生

2007年

改正男女雇用機会均等法施行
新潟県中越沖地震発生
「子どもと家族を応援する日本」重点戦略策定

2006年

認定こども園法施行
教育基本法改正施行
少子化社会対策会議「新しい少子化対策について」決定

キッズデザインの歩み

- 5月　キッズデザイン協議会任意団体として発足
- 10月　記念シンポジウム開催
- 12月　キッズデザイン賞創設プレスリリース
- 調査・研究活動スタート
- NPO設立総会（任意団体時臨時総会）開催

- 3月　**第1回キッズデザイン賞リリース**
- 4月　特定非営利活動法人（NPO）として活動をスタート
- 5月　第1回通常総会開催
- 1周年記念シンポジウム開催
- 8月　**第1回キッズデザイン賞大賞（経済産業大臣賞）決定**
- キッズデザイン博2007（東京・大阪・熊本）開催
- 10月　第1回キッズデザイン賞表彰式開催

- 6月　こどもOS研究会発足
- 11月　「六本木ヒルズ探偵団」を結成し施設の安全点検
- 12月　プロスペクティブ・コンペティション2008（学生と中小企業によるデザインコンペ）
- キッズデザインコンセプトブック創刊

＜第６回＞

感覚アスレチックワークショップ

＜第５回＞

ズーラシアンブラス

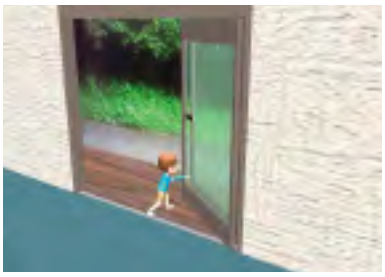
＜第４回＞

お子様連れ配慮商品ベビーシート

＜第３回＞

hairo［はいろ］

川崎市　藤子・F・不二雄ミュージアム



ブレイクアウトドアシステム
（緊急時開放システム）

ＪＲ東日本の子育て支援プロジェクト
「駅型保育園」

蒸気レスＩＨジャー炊飯器

2012年

東京スカイツリー開業
子ども子育て関連３法成立
新幼保連携型認定こども園として単一の施設化
自民党第２次安倍内閣誕生

- 3月　ＩＳＯガイド50見直しサブ委員会へ参加
- 6月　ＣＳＤ認証部会発足
- 7月　キッズデザイン賞**総受賞点数が１０００点**を超える
- 8月　キッズデザイン賞受賞検索サイトがオープン
- 「子どもの創造性と未来を拓くデザイン」研究会発足
- 9月　キッズデザインガイドライン 消費者との意見交換会開催

2011年

東日本大震災発生
福島第一原発事故

- 3月　**キッズデザイン賞「消費者担当大臣賞」新設**
- 4月　東日本大震災復興支援プロジェクト
- 「子どもたちの元気プロジェクト」活動開始
- 6月　経済産業省「キッズデザイン製品開発支援」事業受託（２０１１・２０１２年）
- 7月　知覚アフォーダンス活用研究会発足
- 11月　「平成23年度子ども若者育成・子育て支援功労者表彰」内閣府特命担当大臣賞を受賞

2010年

日本年金機構発足
子ども・子育てビジョン策定
「イクメン」という言葉が広まる

- 2月　学校施設クリニック（東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎、附属小金井小学校）
- 3月　**キッズデザイン賞「少子化対策担当大臣賞」新設**
- 7月　キッズデザインガイドライン部会発足
- 8月　キッズクリエイトＴＯＫＹＯ２０１０（幕張メッセ）参加

2009年

裁判員制度による初の裁判
民主党鳩山内閣誕生
待機児童数が25,000人を超える

- 5月　キッズデザイン賞の**応募３００点**を超える
- 9月　自治体・公益法人とのコラボによる巡回展本格化（大阪・神戸・福井・仙台・四国四県・川崎）
- 12月　審査委員等によるキッズデザインセミナー（全４回）開催

＜第10回＞

東京ゆりかご幼稚園＋里山教育

防災ファニチャーによる
啓発活動への取り組み

＜第9回＞

ルナ ドリームカプセル プロジェクト

ノムラのソーシャルマーケティングへの
取り組み ＜チームM＞

＜第8回＞

MAZDA TECHNOLOGY FOR KIDS

チャイルドシート「ネルーム」シリーズ

＜第7回＞

「触れる地球」中型普及版

コドモ里山ラボ東京森都心

2016年

育児・介護休業法改正
最大震度7の熊本地震発生
G7 伊勢志摩サミット開催
リオデジャネイロ五輪開催

- 2月 キッズデザイン in KANSAI開催
- 3月 ISO TC159／SC1／WG5へ「キッズデザイン」提案
- 6月 **キッズデザイン賞「東京都知事賞」新設**
- 7月 キッズデザイン賞**総受賞点数が2000点**を超える

2015年

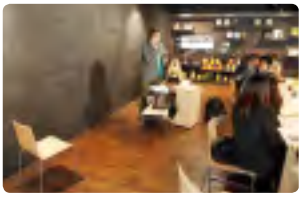
女性活躍推進法成立
子ども・子育て支援新制度施行
マイナンバー制度施行
合計特殊出生率1.46、2年ぶりに上昇

- 1月 経済産業省「クールジャパンワールドトライアル2014（ベトナム）」参加
- 3月 **キッズデザイン賞「男女共同参画担当大臣賞」新設**
- 4月 **キッズデザイン賞「東京都 審査料補助制度」開始**
- 7月 「キッズデザイン」国際標準化検討部会発足

2014年

消費税8%に
地方創生が重点政策に
すべての女性が輝く社会づくり本部設置

- 5月 経済産業省「子どもの安全性確保のための製品設計プロセス指針に関するJIS開発」事業受託
- 7月 キッズデザイン賞**総受賞点数が1500点**を超える
- 10月 産み育て空間デザイン研究会（日本子育て学会との連携プロジェクト）発足
- 11月 セーフティ・グッズ・フェア with サイエンスアゴラ2014（東京都他と共催）



2013年

障害者差別解消法制定
富士山が世界文化遺産に
障害者権利条約批准

- 3月 キッズワークショップカーニバル in ふくしま開催
- 4月 **キッズデザイン賞「内閣総理大臣賞」新設**
- 10月 CSD（Child Safety through Design）認証制度開始

キッズデザインが取り組んできたもの、取り組むべきこと

多くの受賞作が生まれ、多様なステークホルダーの協働による活動が進んだこの10年。「子ども視点、子ども目線」を標榜するキッズデザインの本質はどこにあるのだろうか。4名のキッズデザイン賞の審査委員が各々の視点からその成果を振り返り、デザイン、ものづくり、文明史的な視点からその意味を語った。専門の異なる識者が指摘したのは、子ども・子育てというテーマが持つ、社会や人間にとっての普遍性や拡張性であった。

益田： 多くのデザイン賞が存在しますが、キッズデザイン賞はその中でもかなり異なる方向を向いていると私は思っています。デザインは、自動車のデザイン、家具のデザイン、などデザインという言葉を付ければ成立します。しかし、ここ10年ほどでデザインの見方は変わってきています。誰のための、何のためのデザインであるか。目的や対象が明確であることが物の価値をつくる。その意味で、キッズデザインは当初の考えを超える大きなテーマを掘り始めている気がします。子どもというキーワードを据えれば、それはすなわち、未来のデザインを意味します。子どもの中に全てがあり、それ以外に私たちの未来はありえません。10年間で皆さんと支え合って、あるいは助けられて活動してきた成果が少しずつ見え始めているのではないか、と思っています。

竹村： 私の専門である文化人類学の視点から言いますと、「子ども」は非常に大きな文明的、文化的、社会的なテーマです。人間が他の動物と最も異なる点は、「人間とは子ども化した生物である」と

益田文和氏

批判する眼と解決する知恵を持ちあわせるデザイン、唯一それを持つのがキッズデザイン

益田文和

いうことです。犬や猫は1年も経たないうちに発情期を迎え、大人になっていきます。ところが人間は、十数年にもわたる長い子ども期と、近年では長い老いの時期を持つ、不思議な富士山型のライフステージを持った生物なのです。未熟な状態で生まれ、十数歳までは性成熟も迎えない子ども期が続く。つまり、子ども性は人間の本質であり、それを大切に育んでいく文化や社会をつくらない限り、本当の意味で人間らしい社会や文化は築けません。

キッズデザインは単なる子育てや子ども対象といった意味ではなく、人間の本質に関わる問題を対象にしていると私は考えています。人間らしい社会をどうデザインしていくかという、大きな射程範囲を持っているデザイン思想なのです。10年間の活動や受賞作品にはその英知が詰まっているものがたくさんあったと感じています。これからはそれをいかに社会化していくか、が問われています。

橋田：ものづくりをしている人も、使う人も、大人ばかりという世界の中で、私たちはつい子どもの精神的や身体的な特徴を忘れがちです。私もプロダクトデザインに携わっていますが、つい大人中心のユーザー設定をしてしまう傾向があります。キッズデザインは子どもの身体的特徴、精神的特徴を改めて大人に認識させるという意味で有意義です。

例えば、受賞作の中で「遊具で子どもの体力を伸ばす」という書籍がありました。危険を恐れるあまり、社会がつい過保護になびきやすい中で、本来、子どもの体力や危機回避力を鍛えて育てなければいけない。そのことが健全な成長を促すために必要な過程なのです。こうした知恵や情報を大人自身も知ることが大事だと思います。

安全・安心とは過保護化していくことではありません。私たちの小さい頃は、これほど良い物が少なかったので、ちょっとしたけがから危険を学んだり、体で覚えたりしたものです。作り込み過ぎてしまい、逆に危険を学べない方向へ導くデザインには注意が必要です。

赤池 学氏

子ども目線のバリューチェーンによる価値共創は、新たなジャパン・パワーを生み出す源泉だ

赤池 学

赤池：キッズデザイン賞を考え始めた10年前は、回転ドアに子どもがはさまれて死亡した事故やシュレッダーで指を切断してしまった事故などの例が話題になった時期でした。

当時から子どものためのアワードはいくつも存在しましたが、子どもが使うとは限らないあらゆる製品や施設を子ども目線、子ども基準でデザインしよう、というコンセプトのアワードは国内のみならず海外にもありませんでした。この事実がキッズデザインの深さであると思っています。

もうひとつ、キッズデザインは経済産業省の協力から始まりましたが、内閣総理大臣賞、消費者担当大臣賞、少子化対策担当大臣賞、男女共同参画担当大臣賞と広がり、各省庁の皆さんから支援をいただける流れができたことが初回から審査委員長を務めてきた私にとっても非常に嬉しいところです。

今年の受賞作品の総合的学習支援サイト『Ｅｄｕ Ｔｏｗｎ あしたね』はキャリア教育支援の取り組みです。同じく『和食給食応援』は和食の料理人と栄養士など

給食を提供するネットワークをつなぎ、和食の素晴らしさを伝える活動です。こうした先進例は今後、文部科学省や農林水産省との連携につながる優良な受賞作であると考えています。

益田： 私も数多くの製品デザインを手掛けてきました。世の中が便利になり、さまざまなものが次々と生まれ、魅力的であれば売れていく。それを子どもたちも使う、あるいは大人たちが使う環境に子どもたちがいる、という状況は進む一方です。デザインはこうしたサイクルへ加速度な協力や貢献をしているわけです。

ところが世の中にそうしたものが投入されたために、子どもが不幸になったり、危険な状況が生まれたりすることもあります。高度化、自動化された製品やインフラで子どもが大人では起こり得ない事故に巻き込まれる、精神的に非常にストレスがかかるなど事例は多い。市場の動きが大きければ大きいほど、子どもたちも大きく影響を受けてしまいます。子どもたちは成長過程で、それをずっと引きずっていくわけです。デザインはその事実を、一体どうやって批判的に見ることができるのだろうかと考えます。

キッズデザイン賞は他の賞と比較して、私から見ると厳しく批判的な眼を持つ賞ではないかと思います。そして単なる批判に留まらず、解決策を同時に見つけていく行為でもあります。それは大きな経済の流れやマーケットの動きの中で、時には水を差す場合もあるでしょう。しかしそれを英断することは物を作る我々の責任ですし、失う必要のない命を救う予防策を打つ決断を、社会全員で背負おうとしている気がします。日本のように経済が進みある程度頭を打った段階だからこそ、一歩立ち止まって考えることもできます。それを経済成長の途上にある国にもいち早く導入し軌道修正できるようにするべきですし、キッズデザインはその問い掛けを行うことができると思っています。

創造性とは、人間の「子ども性」が持つ弱さゆえの知恵だ。それを伸ばすことがすなわち、人間らしい社会づくりの構築になる

竹村真一

竹村真一氏

竹村： 人間は、先ほど申し上げた「子ども性」の弱さを引き受ける代わりに、人間固有の強さである創造性が与えられています。文化的に新しいことを創造したり、多様な文化を吸収し自分の生き方や考え方を変えたりすることができる。人間はそういう自由を持っているわけです。

創造性を伸ばしていくことが、すなわち人間らしい社会をつくっていくことだろうと思います。創造性は環境とのインタラクション、他者とのインタラクションの中で生まれます。人間の立体視ができる3Dの目も、樹上生活の時代に森の中で飛び移る枝までの距離を測るのに適した、正面に付いた目になったのです。直立歩行と器用な手足も、樹上生活で木の実をつかんだり、枝をつかんだりするため、残りの2本で体を支えるために進化してきました。人間は、環境とのインタラクションの中で特有の構造が作られ、それを進化させて知性や創造性を育んできた点に、その本質があります。

キッズデザインとして、どのような街の環境をデザインするか、住環境をデザインするかによって、人間の本質を良くも悪くもできる。これからの10年に向けて最も重要なことは、これまでの10年で生まれた素晴らしい受賞作品を総合して、OS（オペレー

橋田規子氏

子どもならではの特徴に改めて大人が気づき直す機会を得る、それはデザイナーにとって有意義な活動

橋田規子

ティングシステム）化していき、それに基づいて個々の提案を評価し、街づくりや地域づくりへの提案を応用していくことです。キッズデザイン自身がもっとアクティブに、10年培った経験資源を誰でも使えるＯＳにして、人間らしい社会づくりに活かしていくことです。このプロセスを始めない限り、次の10年はないというふうに思っています。

橋田： 私は大学で学生を教えていますが、ＳＮＳなど容易にコミュニケーションができるツールが浸透した一方で、人に何かを伝えるというコミュニケーション力は低下してきていると感じています。コミュニケーション力やマナー・ルールは、相手の気持ちになって思いやるということが基本的な心です。その心を鍛えるにはどうしたらよいか？と、ものづくりをしていて常に気になります。この国の子どもたちが大人になり、グローバルな人材として活躍するためのコミュニケーション力の育成をキッズデザイン賞でバックアップしていきたいと考えています。

もうひとつは震災やテロなど危機的な状態でも生き残るサバイバル力も今後、重要になっていくと思っています。先ほどの危機回避力育成もそうですが、こうした力を身に付ける必要はあるのではないでしょうか。デザインの力でこうした課題へチャレンジしていくことも、次の10年へ向けたキッズデザインの大事なテーマになると思います。

赤池： 子ども目線、子ども基準のものや環境をつくろうという面では、キッズデザインは安全知識の循環型社会づくりに間違いなく貢献してきたと自負しています。今後は知識の循環だけではなく、バリューチェーンによる価値の連鎖を生み出していく段階に来ていると考えています。

多様なステークホルダーの共創から生まれた多様な活動を通じて、子どもや親は生きるリテラシーを学んでいく。さらにそれを教育や地域に関わる人たちが補完していく流れをつくっていくことが大切です。キッズデザインの活動と仕組みそのものが、日本発のあらたな価値の発信につながると確信しています。

益田： 私は80年代からデザインと環境について考え活動していますが、ポツダム気候影響研究所のシェルンフーバー所長の言葉が強く印象に残っています。「人間であるために最も重要なことがある。それは自分の子どもを殺さないということだ」。当たり前とも思えるこの言葉の意味は、つまり、２０２０年あたりを契機にしてグローバル規模で大気候変動の時期を迎え、資源、貧困、紛争というやりきれない連鎖が世界中にますます起こるだろう。原因がどこにあるにせよ、それが進行していることを敏感に感じて行動しなければならない、ということでした。危機的状況が迫る時代、世界を容易に結ぶようになった情報ネットワークから正しいことを見分けていく、すべきことを見つけ出す時期に入っていると思っています。それを皆さんと一緒にやっていきたい。皆さんはその状況をつくり、社会をつくっていく立場にいてその力を持っている。デザインもまたその手助けをしなければならない。キッズデザインから大きな気付きが日本に生まれ、それが世界的に連鎖、伝搬していくことを期待しています。

キッズデザイン10年へ寄せて

キッズデザイン賞の創設以来、各界で活躍する第一線の専門家、研究者、デザイナー、クリエイターに支えられてきた。常に時代性を見据え、鋭い視座からキッズデザインを見続けてくれた皆さんに、10年をひとつの節目として、キッズデザインのこれまでとこれから、課題と期待を語ってもらった。

Fumikazu Masuda

審査委員長

益田文和

インダストリアルデザイナー
オープンハウス 代表取締役

キッズデザイン賞は今年で第10回を迎えた。この間、キッズデザインのミッションである子どもたちの安全・安心をどの程度高めることができただろうか。子どもたちの創造性と未来を拓くことにどれだけ貢献することができただろうか。子どもたちを産み育てやすい環境はどれほど整ったと言えるだろうか。問題意識を掘り起こし、改善への試みを誘発することはできたのではないかと思う。と同時に、まだまだこれからだという思いはさらに強い。

＜プロフィール＞
東京造形大学デザイン学科卒業。建設会社、デザインオフィスを経て、インダストリアルデザイナーとして様々な製品のデザイン開発、地域産業のデザイン振興など国内外のプロジェクトに関わる。1991年株式会社オープンハウス設立、代表取締役。

Takashi Muto

副審査委員長

無藤 隆

教育心理学者
白梅学園大学 教授

子どものためのデザインは、子どもとまた子どもを囲む人々と、もの・環境や活動のすべてをよいものにしていくことを目指します。安全であることの上で、子どもの豊かな可能性を引き出し、育てられないか。それを願う多くの人々の関わり方を支えていけないか。そのための多岐にわたるデザインのあり方を考えていく場となってほしいと思います。

＜プロフィール＞
東京大学教育学部卒業、同大学院中退。聖心女子大学、お茶の水女子大学を経て、現在、白梅学園大学子ども学部教授。発達・教育心理学や幼児教育などを専門とする。

Manabu Akaike

副審査委員長

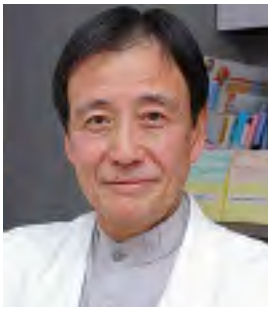
赤池 学

科学技術ジャーナリスト
ユニバーサルデザイン総合研究所 所長

経済産業省始め、各省庁からの協力を経て、その活動を広げてきたキッズデザイン。受賞作品の顔ぶれも多彩になり、社会的な変化や潮流の先取りを感じている。例えば、10周年を機に、子どもたちのための安心・安全な食材開発や食育、農林水産業のキャリア教育などを顕彰する「農林水産大臣賞」枠を是非、形にするなど今後の展開を願う。

＜プロフィール＞
筑波大学生物学類卒業。(株)ユニバーサルデザイン総合研究所所長として、商品・施設・地域開発を手掛ける傍ら、(公財)科学技術広報財団理事、(社)環境共創イニシアチブ代表理事、(社)CSV開発機構理事長などを務める。ウッドデザイン賞、FOOD ACTION NIPPON AWARDの審査委員長。

Tatsuhiro Yamanaka



副審査委員長

山中龍宏

小児科医
緑園こどもクリニック 院長

事故による子どもの傷害は多発しています。WHO（世界保健機関）は「見守り」「心構え」では事故の予防はできないと指摘しています。子どもの事故を予防するためには製品や環境の改善を優先する必要があります。KDAは10年前に設立され、約2000件のキッズデザイン賞を創出してきました。この活動をもっと広げて、子どもたちの安全を推進してくださることを大いに期待しています。

＜プロフィール＞
東京大学医学部卒業。東京大学医学部小児科講師等を経て、1999年より緑園子どもクリニック（横浜市泉区）院長。85年、プールの排水口に吸い込まれた中2女児を看取ったことから事故予防に取り組む。現在、産業技術総合研究所人工知能研究センター客員研究員、NPO法人Safe Kids Japan理事長、日本小児保健協会傷害予防教育検討会委員長。

Masaaki Mochimaru

副審査委員長

持丸正明

産業技術総合研究所
人間情報研究部門 研究部門長

10年を経て、キッズデザインの考え方とブランドは徐々に国内に定着してきたようです。次の10年はキッズデザインを世界に広め、世界中の子どもたちの笑顔を作ることです。

＜プロフィール＞
慶應義塾大学大学院後期博士課程修了、博士（工学）。産業技術総合研究所 デジタルヒューマン工学研究センター長、サービス工学研究センター長などを経て、2015年より現職。身体特性の計測とモデル化、産業応用研究に従事。2007年よりISO TC159／SC3国際議長。2014年より消費者安全調査委員会・委員長代理。

Hiroko Ootsuki

大月ヒロ子

ミュージアム・エデュケーション・
プランナー
イデア 代表

私たちはより良い未来に向かって何を選択し、何を創造しなければならないのだろうか。
キッズデザイン賞においては、勇気ある決断が必要な時期に差しかかっているように思う。応募される方にとっても、あるいは、審査側にとっても、また、世の中の様々な方々にとってもキッズデザインの目指すところが明白に理解でき、ともに手を携えていけるような、新たな動きが創りだせたらと思う。

＜プロフィール＞
武蔵野美術大学卒業。大阪府立大型児童館ビッグバン総合プロデューサー、国立近代美術館客員研究員などを歴任。有限会社イデア代表取締役、国立歴史民俗博物館客員准教授。2013年倉敷にクリエイティブリユースの実験室とクリエイター・イン・レジデンスを主体とするIDEA R LABを開設。日本全国でクリエイティブリユースをキーコンセプトとした公的プロジェクトを複数展開中。

Motoyuki Akamatsu

赤松幹之

産業技術総合研究所
自動車ヒューマンファクター
研究センター 首席研究員

すべての人が子どもの頃を経験していますが、その体験はその人に固有ですし、その記憶は薄れています。そのため、子どものためのデザインをするためには、広い視野からの知見が必要となります。それがキッズデザインです。多くの経験、データ、評価を蓄積して、それに知恵を加えて、子ども達の未来に貢献していければと思います。

＜プロフィール＞
2015年より産業技術総合研究所 自動車ヒューマンファクター研究センター 首席研究員。名古屋大学客員教授。人間工学一般、車載機器ヒューマンインタフェースの研究、運転行動の解析とモデル化の研究等に従事。ISO TC22／SC13／WC8（自動車の車載システムのヒューマンインタフェース）の国際エキスパート、（一社）日本人間工学会認定人間工学専門家。

Shinichi Takemura

竹村真一

文化人類学者
京都造形芸術大学 教授

子どもや子育てを軽視する社会は、結局「人間」を軽視した社会になります。決して子どもや子育てのためだけでなく、大人や高齢者も含めた「人間」のありようを見据えた試金石として、真に「人間らしい文明」をデザインするために、キッズデザインはあります。子どもの知性や適応能力をバカにせず、子どもの「創造性」を育むようなデザインを今後も期待します。

＜プロフィール＞
東京大学大学院文化人類学博士課程修了。京都造形芸術大学教授。Ｅａｒｔｈ Ｌｉｔｅｒａｃｙ Ｐｒｏｇｒａｍ代表。地球時代の新たな「人間学」を提起し、ＩＴを駆使した地球環境問題への独自の取組を進める。世界初のデジタル地球儀「触れる地球」や「１００万人のキャンドルナイト」などを企画・制作。国連ＵＮＩＳＤＲ（国連防災機構）の「国連防災白書２０１３」コンセプトデザイン・ディレクター。

Yoshifumi Nishida

西田佳史

産業技術総合研究所
人工知能研究センター 首席研究員

キッズデザインの柱の一つは、デザインによる子どもの傷害予防にあり、日本初の新しい試みです。最近では、データやＩｏＴを活用する新しい時代が到来し、キッズデザインにも新たなアングルが加わろうとしています。キッズデザインの考え方はより広く、心身機能や認知機能が変化する人に配慮した社会づくりにも応用可能だと思っています。「生活機能レジリエント社会」のエンジンとしてのキッズデザインを応援したいと思います。

＜プロフィール＞
東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。産業技術総合研究所 デジタルヒューマン工学研究センター 生活・社会機能デザイン研究チーム長などを経て、同研究所 人工知能研究センター首席研究員。２００３年より山中龍宏先生とともに子どもの傷害予防学の研究に従事。

Noriko Hashida

橋田規子

プロダクトデザイナー
芝浦工業大学 教授

多くの製品は、様々な世代が混在する環境に置かれています。製品を設計製造している側は大人が殆どで、つい子どものことを忘れがちです。是非キッズデザインの視点を参考に、使いやすく安全な、そして心地よいデザインの製品を作っていっていただきたいと思います。

＜プロフィール＞
東京芸術大学美術学部デザイン科インダストリアルデザイン専攻卒業。ＴＯＴＯ株式会社退社後、２００８年ＮＯＲＩＫＯ ＨＡＳＨＩＤＡ ＤＥＳＩＧＮ設立。２００９年より芝浦工業大学デザイン工学部教授。水廻り器具、オフィス家具、生活用品等のデザインを手掛ける。グッドデザイン賞多数。新しい視点で心と体に心地よいデザインを提案する。

Kozue Hibino

撮影：安彦幸枝氏

ひびのこづえ

コスチュームアーティスト

自分が子どもだった時を忘れずにいたい。カッコ悪い物や子ども扱いして幼稚に表現している物に強い嫌悪感を抱いて、そういう物を平気で与える大人の存在を拒絶し子どもの殻に閉じこもろうとしました。子どもだからこそ良い物を見分ける力がある事を理解しながら物作りをして欲しい。そしてそれが子ども達の憧れになって次の時代に受け継がれ成長するデザインが生まれて欲しい。

＜プロフィール＞
東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。コスチュームアーティストとして広告、演劇、ダンス、バレエ、映画、テレビなど発表の場は多彩。ＮＨＫ Ｅテレ「にほんごであそぼ」セット衣装担当。森山開次、川瀬浩介とのコラボによるダンスパフォーマンス「ＬＩＶＥ ＢＯＮＥ」を展開。「ちいさな生きもの研究所」ワークショップを毎月渋谷ＬＯＦＴで開催中。宮本亜門演出ミュージカル「狸御殿」舞台衣裳担当。

Shunsaku Miyagi

宮城俊作

ランドスケープアーキテクト
設計組織 PLACEMEDIA・
パートナー

私にとって、キッズデザイン賞の審査に携わることは、デザインに関わる自らの立ち位置を確認するうえで、とても大事なことであり続けています。子ども目線で考えることで、人間にとって最も根源的な環境のありかたに、深いところでつながっていけるように感じるからです。できるだけ多くの方々が、このことを意識することで、子どもたちをとりまく様々な環境がどんどんよくなっていくことを期待したいと思います。

＜プロフィール＞
京都大学大学院・ハーバード大学デザイン学部大学院を修了。設計組織ＰＬＡＣＥＭＥＤＩＡ パートナー、奈良女子大学大学院教授。ランドスケープアーキテクトとして、様々な環境デザイン、都市デザインに関わる。

Eiji Mitooka

撮影：白鳥真太郎氏

水戸岡 鋭治

デザイナー
ドーンデザイン研究所 代表

私のデザインのテーマは子ども達と次の世代のために笑顔と笑いが生まれる、清く正しく美しいデザインをすること、そして豊かなコミュニケーションが自然に生まれ、仲良く過ごせる時間と空間をデザインすることです。そして社会や個人がデザインというものを特別視しない国、即ちデザインレベルとして、穏やかな常識・良識・美意識のある国が夢です。

＜プロフィール＞
岡山県立岡山工業高校デザイン科卒業。サンデザイン（大阪）およびＳＴＵＤＩＯ ＳＩＬＶＩＯ ＣＯＰＰＯＬＡ（ＭＩＮＡＮＯ）を経て、ドーンデザイン研究所を設立。建築・鉄道車両・グラフィック・プロダクトなど様々なデザインを手掛ける。主な作品に、クルーズトレイン「ななつ星ｉｎ九州」など。九州旅客鉄道株式会社デザイン顧問、両備グループデザイン顧問、財団法人石橋財団理事。

Toshimasa Yamanaka

山中敏正

筑波大学 芸術系長・教授

キッズデザインはその響きの良い名前の中に、子どもに気を配ることの大切さを表しています。すべてのデザインに「もしそこに子どもがいたら?」という思考を加えようという思想です。子どもだったことを思い出せなくなっても、たとえ子どもが立ち入らない場所でも、身長１００センチの世界や何にでも興味を持って触りたくなる気持ちを「今、想像する」ことがデザインに求められているのですよ、というメッセージが込められているのです。

＜プロフィール＞
千葉大学工学部工学研究科修了。旭光学工業（現リコー）在職中、イリノイ工科大学で研究員。筑波大学芸術組織でデザイン教育、大学院の感性認知脳科学専攻で感性科学の研究と教育を行う。芸術専門学群では、身の回りから国際社会に拡がるデザイン教育に取り組む。

Chie Morimoto

撮影：枦木 功氏

森本千絵

コミュニケーションディレクター
アートディレクター

子どもという存在は未来そのものです。つまり未来をどう育てるか、考えていくかを問う賞であってほしいと思います。企業であっても有志であっても答えを決め、塗り絵をさせるようなレールを作るのではなく、子どもたち自身の中にある力を活かし信じた想像力のあるものが生まれるとよいと思います。また、生きていく上で地域、隣人との繋がりを深めることなどを導いてあげられるものを期待します。世の中にとって未来をいっしょに育むことを考えるきっかけになれる場でありたいと願っています。

＜プロフィール＞
武蔵野美術大学卒業。博報堂入社後、ＮＨＫ連続テレビ小説のタイトルや、ミュージシャンのアートワーク、本の装丁、映画・舞台の美術、動物園や保育園の空間ディレクションを手がける。株式会社ｇｏｅｎ。主宰。武蔵野美術大学 視覚伝達デザイン学科客員教授。

キッズデザイン開発ストーリー2016

かつてこの国にあった知恵や慣習を現代に活かす。
懐かしくも新しい未来、
それがキッズデザインの目指す
ひとつの形であることを教えてくれる。
地域や高齢者、専門家との共創が
新たな価値を生み出す。
多様なつながりこそ、
子育ての複雑な課題を克服する
唯一の手段であることが明らかになる。

東京ゆりかご幼稚園＋里山教育

東京都八王子市の森に囲まれた園舎と園庭から子どもたちの元気な声が聞こえる。

学校法人東京内野学園東京ゆりかご幼稚園は、木造建築の園舎で深い庇が目を引き、園庭には里山の地形を活かした手作りの遊具や棚田、小川ビオトープが点在する自然豊かな環境の中にある。東京ゆりかご幼稚園園長の内野彰裕氏が語ってくれた。

「当園は創立40周年を迎える年に、豊かな自然環境を求めて移転しました。開発前のこの地は草が生い茂り、水はけの悪い荒地でしたが、豊かな里山に囲まれ、大きな可能性を感じました。敷地は2.2ヘクタール、周囲の森は47ヘクタール、この広大な大自然に移転開園までの3年間、子どもたちを連れて来ては遊ばせ、小川、池、棚田、畑等を親子で造り、里山の環境を整えていきました」。

建物で象徴的な3.5メートルの深い庇は特殊なH型断面のLVL（単板積層材）で、13・5メートル木の梁によって片持ちで支えられ、自然と教室とが境界なく連続していて、農家の縁側のような使い方もできる。日本の木材製造技術と加工技術は高度に発達しており、住宅用に流通している高性能で安い木材や自動プレカットによって建物のコストを最小限に抑え、木サッシや床材は再利用した。

そして大きな特徴が里山教育のプログラムである。自然と関わり、その恵みをいただき、恩返しをする。広い園庭で展開される多彩な活動は子どもに「生きる力」を身につけてもらいたいという思いが込められている。内野園長の土に触れ、植物に触れ、動物に触れた体験が、同園の里山教育の根底にある。

「里山教育は自然、環境、食農、労作、そしてESD（持続可能な開発のための教育）を方針としています。里山の四季の変化を肌で感じながら、自然の遊びに没頭し、里山の循環に寄り添いながら日々を過ごしています。

森の中では特別な遊具がなくても1日

子どもたちは園庭や遊具にそれぞれの「居場所」をつくるのが得意だ

園舎は木質感でいっぱい。内と外をうまくつなぐ空間構成だ

中、夢中になって遊べます。小川ビオトープでは、メダカやドジョウ、カエル等さまざまな生き物を探し採取して観察し、同じ場所に帰してあげます。小さな命を大切にする気持ちを育み、科学的に物事を考えられるきっかけを与えてくれます。棚田では稲を育てます。手間をかけて、汗を流して、物事を成す労作を通して、お米1粒のありがたみ、命をいただくことへの感謝の気持ちを学びます。畑では堆肥を使った土作りを経て、野菜を育てます。収穫後は調理して食べたり、給食のメニューに使ったりします。子どもたちは自然と園舎とが調和した理想的な里山環境で心身ともに健やかに育ち、そして巣立っていきます」。

入園を希望する子どもの親はこの自然環境を活かして豊かな体験をして欲しい、という人が多いそうだ。その環境に魅せられ、今では1時間をかけて遠方から通園する子どもも増えた。最近では韓国や中国など、海外からの視察も増えているという。里山教育は日本の文化と思われがちだが、グローバルスタンダード化していく日も遠くないようだ。

「今後は国際的な交流が重要だと考えていますし、日本から里山教育の良さを発信していければと思います。規律正しさや思いやりの心、ごみを捨てないなど、日本人の行動や精神がいったいどうやって育まれるのか、幼児教育にその原点があるのではないかと注目されているのかもしれません。その意味で、東京からこうした価値観を発信できることは意義があることだと思っています」。

深い庇はこの園舎の象徴。中間領域とも呼べる100mのえんがわが印象的

里山環境を活かし、自然とふれあい循環を感じて育っていく

TSURUMI こどもホスピス

減少する子どもの死亡率に対し、在宅での人工呼吸患者数は増加傾向にある。医療の進歩によって、重い病気の子どもが救われる一方、難病を抱えたまま在宅で暮らす子どもは増えている。難病の子どもは同世代の子どもと同じように、遊び学ぶ機会が損なわれている。一方で在宅看護を続ける家族の負担は大きく、子どもと家族が地域社会から孤立しがちなこと、社会から認知度が低いこと、この三つが課題である。TSURUMIこどもホスピスはこうした社会的課題の克服から生まれた施設だ。大成建設株式会社の出口亮氏は言う。

「一般的に成人のホスピスは末期がん患者等の終末期医療のための場ですが、こどもホスピスは大きく異なります。まず、子どもの成長を支援する場です。いかなる病気を患ったとしても、子どもは成長を続けます。さらに24時間看護を続ける家族の負担を軽減するレスパイトケアの場でもあります。TSURUMIこどもホスピスは、日本初のコミュニティ型こどもホスピスとして構想されました。病院ではなく家である、地域に根差した活動である、財源を寄付に頼った慈善活動である、といった特徴があります」。

設計に求められた点は、日本初コミュニティ型こどもホスピスのあるべき姿を描き、それを具現化することであり、そのために生活のシーンを思い描くことから始めた。この場所で過ごす時間の中には楽しい時も、ふと泣きたくなる時もあるかも知れない。その時ごとの気持ちに応じて居場所が選べる、だがその居場所が孤立せずに緩やかにつながっている。そんな状態が大切ではないかと考えたという。

それは家のようにくつろげるだけでなく、村のような場所をつくる、というコンセプトとなり、難病の子どもと家族に多様なワクワク、安らぎ、出会いという3つの価値をもたらす。

敷地は大阪の鶴見緑地公園内で、周辺環境に合わせ4つの特徴ある場所を造り、それらを開かれた道でつないだ。中庭を囲むように6つの家が配置された。難病の子どもと家族が地域や社会とつながれる場となり、一般の子どもと共に遊び家族同士が日常的に触れ合える場を目指した。

「6つの家には、お庭の部屋、富士山の部屋など特徴を持った部屋があります。その家々をつなぐ道の空間を歩くと楽しさや喜びに満ちたワクワクする場面に出会います。小さなたまりのスペースやさまざまな形の庭があり、ちょっと距離をとって休んだり、時には隠れて泣いたりできます。仕上げには木材をふんだんに使い、フワフワしたサインや柔らかいカーテンなど手触りを大切にデザインしました。中庭に面した深い軒は、夏の日差しを遮ります。道の空間には心地よい風が抜け、1年を通じ多くの時間で自然を感じながら安らげます」。

日本初のコミュニティ型こどもホスピスであるTSURUMIこどもホスピスは、難病の子どもと家族に個別のサービスを提供するため、慈善活動で寄付によって運営されている。活動を継続していくためには、地域、社会の理解と支援が必要である。そのためにも全ての人の心を動かす優しい風景となることを目指した。家のように安らげる場所でありながら、地域に対しても開いていく必要がある。この二軸両立を見事に体現した魅力的な施設となっている。

木材をふんだんに使った「ひろい道」の空間

地域に開かれ、様々なイベントも開催される

6つの家とつなぐ道がつくる村のような風景

建物のどこにいても、中庭を介して互いの様子が感じられる

ダイヤ ベビーベッドかや

蚊帳はかつて日本の家庭にあった虫よけのアイテムである。昔ながらの蚊帳をベースにして、開発された製品は「ベビーベッドかや」である。株式会社ダイヤコーポレーションの水村亮太氏は語る。

「開発の背景として、蚊を媒介とした感染症の問題が近年大きな問題となっていることがあります。日本国内でも日本脳炎や約70年ぶりに感染が確認されたデング熱等があります。ワクチンや治療薬がない感染症もあり、刺されないための対策が必要です。赤ちゃんは体温が高く、大人よりも新陳代謝が盛んなため、蚊に刺されやすいといわれています。免疫力が未熟なため、蚊に刺されると激しい痛みを伴う炎症を起こすこともあります。赤ちゃんの健康を守るために虫よけに対する万全の対策が必要と考えました。

蚊帳は昭和40年代、下水道等の衛生環境の発達やエアコン等の普及によって、急速に日本の家庭から姿を消していきました。しかし今でも赤ちゃんが眠る部屋で殺虫剤を使いたくない、エアコンや扇風機の風を直接当てたくないという理由から、蚊帳を愛用する根強いファンもいます。かつての日本人の知恵を応用して、この現代の生活にマッチするような製品を作りたいと考えたのです」。

蚊帳でベッドの下までしっかりガードすることで、蚊の侵入を確実に防ぐ。細かいメッシュ生地はエアコンや扇風機の風が直接、乳児に当たることを防ぎ、安心して眠れる。蚊帳の正面は大きく開き、乳児のおむつ替えなどの世話が楽にでき、ベッド下にはおむつなどの収納も可能だ。取り付け方法は、ベビーベッドに蚊帳をかぶせ、ひもを結んで固定するだけとごく簡易だが、7カ所のひもで固定され、開閉を頻繁に行ってもずれない。細かな配慮に満ちた設計となっている。ワイヤ等を使用しないため、小さく折り畳んで収納することも可能である点も狭小な日本の住宅事情に合っている。洗濯機でも洗えるため、衛生面も問題ない。素材は蛍光染料を使わない、健康に優しいメッシュ生地を採用している。

「弊社ではベビーカー関係のグッズを多く手掛けており、虫よけカバーもありました。今回の蚊帳はその縫製技術を応用して製品化しています。非常にシンプルな製品ですので、デザイン性と機能性を盛り込むことは非常に難しい。育児で毎日忙しい状況で使われますので、できるだけシンプルな形にして、見ただけでどういう使い方をするかわかるようなデザインを心がけています」。

収納や衛生面の配慮も万全だ

子どもの世話がしやすい前開きがうれしい

孫育て専用ほ乳瓶「ほほほ ほにゅうびん」

BABAラボは、子育て中の働きたい母親や子どもが手を離れたおばあちゃんまで、50名強のスタッフが活躍している工房である。地域の女性高齢者（最高齢は87歳）が中心となり長年の知恵や経験を生かした商品開発やマーケティングを行う。受賞作の「孫育て専用ほ乳瓶」もこうした取り組みから生まれた。シゴトラボ合同会社の桑原静氏はこう語る。

「おばあちゃんたちはとてもパワーが溢れ、ボランティア活動などにも積極的に参加しています。そのなかでも、孫育てという役割があります。パパ・ママ世代の役に立ちたいと考えているおばあちゃんたちはとても多い。社会的には共働きが急増しており、祖父母に子育ての支援をして欲しいという声は増加しています。

おばあちゃんが子どもの面倒を見る機会は増えていますが、彼女たちが使いやすい子育てグッズはまだほとんどありません。赤ちゃんには優しいが、使う人に優しいとは限らない。こんなエピソードがあります。私もおばあちゃんに赤ちゃんを預けていましたが、ミルクをあげてもすぐにお腹が空く、というのです。ミルクを作っているところを見たら、目盛りを読み間違え、湯を入れ過ぎて本当に薄いミルクを飲ませていたのです。

孫育てを手伝いたいというおばあちゃんがもっと使いやすいグッズが必要だ、まずはほ乳瓶から着手しようということで始めました」。

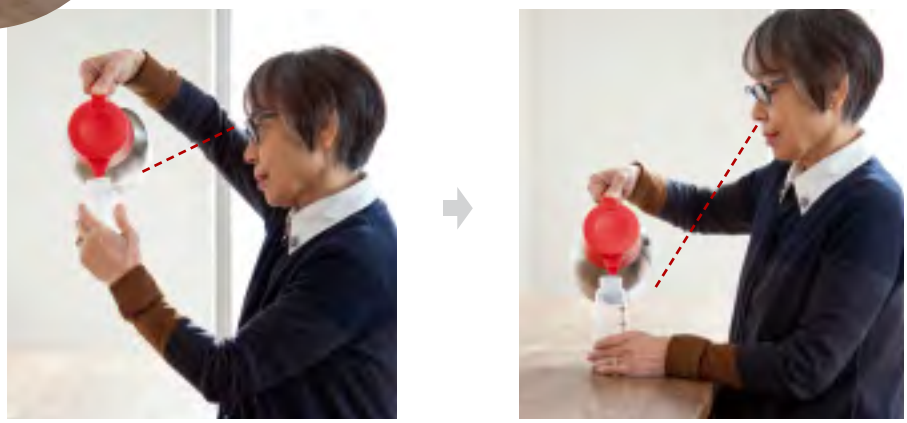
高齢者が使うほ乳瓶の問題点として2つが挙がった。一つは使いやすい形状、もう一つが目盛りの見やすさだ。

高齢になると握力が弱くなり、ほ乳瓶を落下させてしまうことがある。危険なケースでは赤ちゃんの顔の上に落下させる事故もあった。スタッフや近隣の高齢者に参加してもらい、持ちやすさの調査を実施、数ある形の中から、指先がフィットしやすい花びら形状のほ乳瓶が選ばれた。

目盛りの見にくさも課題だった。目盛りがよく見えないと台に置いたまま湯を入れる作業ができないため、持ち上げて湯を入れるようになる。その際、湯がこぼれ、やけど事故につながることがとても多い。

芝浦工業大学橋田研究室との共同開発で、4年をかけ孫育てほ乳瓶は完成した。

「私たちはメーカーとしてではなく、おばあちゃんが世の中で必要とされる存在であって欲しいという思いから様々な取組をしています。今、保育業界でもシニアの方の再就職が大変増えています。子育て支援と高齢者の活躍の場の両立は日本の現状にとって、最も有効なアプローチではないかと考えています」。



見やすさ、持ちやすさの工夫から子どもにも高齢者にもやさしい

防災ファニチャーによる啓発活動

熊本地震の記憶も新しい今年、地域防災と子どもの遊ぶ公園をテーマにした作品が受賞した。防災ファニチャーとは、私達が暮らす街、通勤している街にある施設やインフラを防災設備として有事の際に活用するという発想である。普段はベンチだが、座部を開けて展開するとかまどになる。テントを張れば備蓄倉庫や簡易救護施設になる遊具、座面をひっくり返すとトイレになるようなスツールなどである。株式会社コトブキの山﨑麻衣子氏に開発の経緯を聞いた。

「1995年の阪神淡路大震災の際に状況調査を実施したところ、公園で弊社の遊具やパーゴラにビニールシートを掛けて避難されている様子を見たことが、防災ファニチャーが生まれる契機になりました。かまどになるベンチ、有事の際に役立つ物が収納できるベンチ、マンホール上に設置するだけの簡易トイレなどを開発して、2000年から発売しています。その後、使い勝手や管理面の課題克服、安全性の向上に関する改良を加えて、現在のような製品になっています」。

その後、東日本大震災や記憶に新しい熊本地震など日本では多くの災害が発生している。防災ファニチャーを取り巻く環境も変化しているという。コミュニティでは防災訓練の実施数が増えた。防災力はコミュニティ力と非常に関係していると近年言われているが、子どももコミュニティを形成する重要な一員であることから、正しい防災知識を伝える義務がある、と考えている。その一環が同社が行う啓発活動である。

「公園など日常で使う場所の防災ファニチャーには機能や使い方サインを付け、親から子どもへ防災をテーマに話をするきっかけにして欲しいと考えています。さらに子どもから大人への情報伝達という考えで、近年では子ども向けの防災キャンプ等も増えています。かまどベンチの貸し出しやスタッフ派遣などを行っています。子どもたちが身近に災害を知る・学ぶためにサインのイラストを親しみが持てるデザインに変えたり、防災ミニブックの製作と無料配布、公園のスツールにも親子で学べるイラスト等をデザインしています。また、子ども向け教材を通信教育や学習塾へ積極的に提供しています」。

同社は公園遊具を多く手掛けているが、災害が発生した際に一定の面積を取っている場所であるため邪魔物扱いされる場合があるそうだ。その遊具自体が災害時に貢献できるような設備になることでコミュニティへの貢献につながるに違いない。

遊び慣れた公園が、災害時には避難拠点となり、通常は子どもイベントにも活用される

かまどベンチ

遊具の柱を利用し、テントを張ることができる

中には五徳があり、かまどとして機能

親しみやすいイラストを用いたサイン

MaBeee（マビー）

クリエイティビティを刺激する実に楽しいデバイスが生まれた。スマートフォンが乾電池で動く電車や車のリモコンに変身し、加速や傾きで制御できるようになる、独創的な製品がMaBeeeだ。

IoT（Internet of Things）はモノが通信機能を通じて相互につながることで、相互制御など新たな価値を生み出す仕組みを指す。乾電池に通信機能を搭載し、新たな使い方を提案した製品と言える。ノバルス株式会社の岡部顕宏氏はこう語る。

「小さなお子さんでも乾電池と同じように簡単に使えるというコンセプトで開発しています。スマホに専用アプリをダウンロードし、単3電池ケースの形をしたMaBeeeに単4電池をセットします。単3電池で動くおもちゃの電池ボックスにセットすると、スマホでコントロールできるようになります。

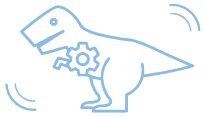
専用アプリには多彩な機能があり、振ってコントロールしたり、声の大きさでコントロールしたりできます。電車のおもちゃやミニ四駆にセットして、走れ、走れ、と声を掛けると、それに応じて速くなったり止まったりできます。傾きモードはスマホを傾ける角度で出力がコントロールでき、ミニ四駆の場合、アクセルを踏み込むようなイメージで倒すと速く走り、起こすと止まるなどの制御ができます。タイマーモードはカウントダウンでスタート、ストップができます」。私たちに身近な乾電池は約130年前に日本人が発明したものである。その間、電力供給という機能が変わっていなかったが、全く新しい使い方の提案がMaBeeeなのである。体を使って振ったり、叫んだり、自分のアクションと連動して物が動くため、全身で楽しむことができる。

「意外と多いのが、お父さんが小さなお子さんと一緒になって、本気になって遊んでいる様子です。親子で楽しく学び、遊びの懸け橋として使っていただくことも私たちの望みです」。

乾電池の手軽さとIoTの将来性を掛け合わせた優れた製品であることは間違いないが、最も望むことは、MaBeeeで遊んだ子どもたちが、20代、30代になった時にスーパーエンジニアに育っていることだと言う。クリエイティビティとテクノロジーを融合させる、新たなツールが玩具の世界を変えるかもしれない、そんな期待を抱かせてくれた。

例えばこんな使い方

車玩具 → 行け！のかけ声で、マシンが動き出します。

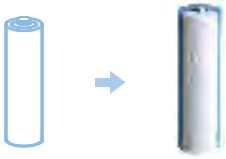


工作ロボット → ふるモードや声モードで、作った工作で対戦ゲームが楽しめます。

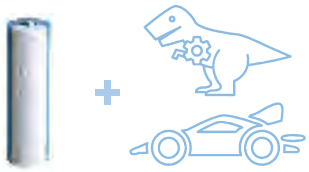
電車玩具 → 駅でゆっくり停車したり、坂道で急加速など、運転手気分が楽しめます。

ランプ → タイマーモードを使えば、ランプの消し忘れがなく安心です。

MaBeeeの使い方



① 市販の単4電池をMaBeeeにセット
※MaBeeeは単3電池形状です。



② MaBeeeを単3電池駆動の玩具などにセット

③ スマホアプリでコントロールします

和食給食応援団

2013年12月、和食が無形文化遺産登録された。食はその国の文化であり、生きる礎でもある。食育が各地で盛んに行われるようになっているが、学校現場ではなかなか和食が提供される機会が増えていないのもまた事実である。合同会社五穀豊穣の西居豊氏は言う。

「私たちの会社は東京の築地場外市場にあり、生産者から野菜や魚を仕入れ、料理人に卸す仕事が主です。2011年頃、生産者の方が米の授業をするために上京した際、給食にパンと洋食が出てきました。献立表を見ると、ほとんどが洋食です。理由を尋ねると、献立を立てる栄養教諭・学校栄養職員が都内では半分くらいは20代で煮物など和食の献立がわからないとのこと。子どもも残食が多く、和食を出したくないという意見がありました。

私たちは和食の料理人にこだわりの野菜を卸していますので、彼らに声を掛け、協力いただいたことが始まりです。最初は8人で2年間ほど活動しました。和食が無形文化遺産登録されたことで、農水省からの支援もあり北海道から沖縄まで各地に行けるようになりました。千葉の南房総では、内陸部では魚をあまり食べないという子どもが多かったので、1人1貫ずつ鮨を握ってもらいました。北九州では漬物を盛り合わせてもらい、美しく盛るにはどうするか、配膳のやり方を子どもたちに学んでもらいました。お母さんにも出汁の引き方を伝えるなど活動を広げていきました」。

最近では栄養教諭・学校栄養職員など献立を立てる関係者にも調理講習会を実施している。1人当たり500人ほどの生徒の給食を年間200食作っているため、格段に広がりは大きくなる。平成27年は52地域で実施し、平成28年9月までに推定100万食以上の和食給食を提供した。今年度は100地域の訪問が計画されている。活動の継続のためにはパートナーづくりも欠かせない。食品メーカーや和食材メーカーから商品や資金の協力を仰いでおり、現在65社が協力をしている。

「子どもは和食が嫌い、洋食が好き、というのは先入観でしかありません。出汁をおいしく引いてつくれば誰も残さない。ほとんどの子どもがもう一回和食を食べたいと言ってくれますし、学校の先生も食べてくれるのならば回数を増やしたいと言ってくれます。そのおかげで、週のうち、平均1.8回程度だった和食が3.8回まで増えている例も多くなりました」。

東京オリンピック・パラリンピックが2020年に開催される。それまでに日本の子どもが和食を世界の人たちに話せるような環境をつくりたいと考えている、西居氏は思いを語ってくれた。

「日本料理 賛否両論」笠原将弘氏による児童向け食育授業

「鈴なり」村田明彦氏による
栄養教諭・学校栄養職員向け調理実演会

「京料理 たか木」高木一雄氏が考案した
人日の節句の和食給食献立

お小遣いの500円から消費や金融と環境のつながりを知る
コンテンツが巧みだ

JUNIOR SAFE（じゅにあせーふ）

お小遣いの500円の使い方と地球環境の関係を学ぶ。その関係を巧みに伝える媒体が、子ども向け環境情報誌『JUNIOR SAFE』である。健全な消費者育成の視点から、今回の受賞となった。株式会社三井住友フィナンシャルグループの山岸誠司氏は開発の経緯を語ってくれた。

「まず、金融機関の社会的責任という点です。私たちはCSRの取り組むべき重点課題として、環境、次世代、コミュニティの三つを掲げており、その取組の答えの一つがこの冊子でした。

さらに、環境と金融の関係がわかりにくいという点です。環境展示会「エコプロダクツ」の2015年における来場者アンケートでは、興味・関心がある展示分野として金融は最下位の12位、興味を持った展示分野でも11位と低い順位でした。特にエコプロダクツにも多く来場する次世代の子どもに対して、いかに環境と金融の関係を上手に伝えるかが課題でした。

また、三井住友フィナンシャルグループでは、法人のお客様へ環境情報を提供する情報誌『SAFE』を発行しています。今年で20年目を迎える『SAFE』では、環境情報や企業の取組を紹介してきました。こうした記事は教科書と違う新鮮さがあるので、子どもにとっても会社や働くことへの興味につながるのではないかと考えました」。

『JUNIOR SAFE』のテーマは、「未来を変えるお金の使い方」である。導入部では倫理的な消費として、金融機関らしくお金をどう使うかという投げ掛けを行い、子どもの身近な状況に置き換えて考えられるよう、お小遣いの500円で考える選択肢を並べた。選択の主体は子ども自身であることを意識させ、銀行キャラクターのミドすけファミリーがフォロー役を務める。お金の使い方の事例紹介として、フェアトレードのチョコレートや森林認証紙のノートを取り上げ、子どもが購入する際の視点の一例として、環境や社会に役立つお金の使い方を紹介している。ただし、その選択が正しいという誘導にはならないよう、表現にも工夫した。やや難しい部分は、親や先生の解説により理解を深められるコラムを入れ、最後は一人一人の行動からでも地球の未来は変えられる、というメッセージで締めくくっている。

冊子の後半は、環境に役立ち夢のある企業の取組を「チャレンジ」として紹介する一方で、克服すべき課題も明示した。既に実用化している企業の取組や、難しい用語の解説、トピックに関係する環境データの紹介も掲載している。

『JUNIOR SAFE』は昨年12月の創刊以降、エコプロダクツや全国の拠点の店頭、環境イベント等で活用しまして、これまで8000部を無料で配布しました。三井住友銀行の公式Facebookにもアップしたところ、アクセス件数は約1万5000件に上っています。

エコプロダクツや銀行見学会、全国で約10万人が加盟し環境活動を行う「こどもエコクラブ」の全国フェスタでも人気を博しています。

今後も地球環境や社会のために、自分で考えて行動できる子どもが一人でも多くなるように、さまざまな活動でこの『JUNIOR SAFE』を活用していきたいと考えています」。

「未来を変えるお金の使い方」という重要かつ現代的なテーマに真正面から取り組んだ、金融グループが発行する環境情報誌として貴重なアプローチだ。価値観の多様化のなかで未来の消費者としての選択眼を拓いて欲しい、というメッセージが明確に伝わる媒体である。

はぐくみプログラム

日本では急激に少子高齢化が進み、育児期世代が安心して子どもを産み育て、働き続ける環境を整えることは企業にとっても大きな課題である。各企業は制度面を充実させ、育休や時短などの制度の導入強化が進んでいる。「はぐくみプログラム」はこうした流れを起点にしながらもオリジナリティに富んだ取組が評価された。凸版印刷株式会社の馬渕聖子氏は語る。

仕事と育児の両立は職場の多様な立場の人々の理解が欠かせない

「弊社でも両立社員の数は年々増え、勤務体制や手当てなどの制度面で、仕事と育児の両立支援を実施しています。社員の活用も進み、実際、仕事と育児の両立をする社員も増えています。私も2010年に出産し、1年後に復職しました。その時は法定水準を上回る制度が導入されているから、スムーズに働き続けられるだろうと信じて疑わなかったのですが、復職してみると、子どもが肺炎で入院して1週間会社に行けない、自分1人で完結できていた仕事が周囲の力を頼らないと完結できない、など制度だけでは整理しきれない、仕事と育児を続けたいという心が折れかける場面を何度か経験しました。

制度を超え、両立に対する不安を払拭し、仕事やキャリアアップに対する意欲を高めていく、いわば心を支援する仕組みがない。これをつくっていくことが新たな課題であると気付きました。それがはぐくみプログラムです。

取組は2012年から始まり、育児休業中の社員を支える『はぐくみアートサロン』、会社全体で両立について学ぶ『はぐくみセミナー』、育児期社員同士がネットワークを構築していく『はぐくみサークル』で構成されています。はぐくみアートサロンでは弊社のグループ会社である芸術造形研究所が有する臨床美術というアートメソッドを応用し、育児休業中の社員と子どもにアートプログラムを楽しんでもらうことで、育児期の心のリフレッシュを促しながら、育児休業中に不足しがちな会社の情報を提供し復職に向けた前向きな気持ちづくりを支援しています」。

幼い子どもと一緒に実施するプログラムゆえ、口に入ったりしても安全な画材等を使い、子どもが手を動かして作品を作る。母親と一緒に作品を完成させ、最後は鑑賞会を行う。あわせて配布するはぐくみ通信では、会社の最新状況や先輩パパ・ママ社員の両立ノウハウを紹介し復職に向けた気持ちづくりを応援する。

はぐくみセミナーは育休後コンサルタントの山口理栄氏を講師に迎え、両立をしている社員、上司、同僚など様々な立場から両立について学び、互いの理解を深めるセミナーだ。

はぐくみサークルは育児期社員を少人数に分け、ランチミーティングをしながら悩みや解決策を話し合う場だ。自分だけで抱えがちな悩みを互いに引き出し、共有して、支えていく取組だ。

「当初は両立社員の多い東京で始まりましたが、全国に広がっています。セミナーには出産を控えた女性だけではなく、共働きをするであろう男性社員も非常に多く参加するようになりました。今後も継続して多様な生活背景を抱える社員が互いに認め合い、支え合って働き続けられる風土を育んでいきたいと考えています」。

休業中の社内情報などを共有、心理的不安を払しょくする

アートを活用した独創的なプログラムを取り入れた

第10回 キッズデザイン賞

最優秀賞

優 秀 賞

奨 励 賞

特 別 賞

最優秀賞［内閣総理大臣賞］

東京ゆりかご幼稚園＋里山教育

学校法人 東京内野学園 東京ゆりかご幼稚園
渡辺治建築都市設計事務所
リズムデザイン＝モヴ
三高設計

受賞理由

里山風景になじむ木造平屋の建物は、広い開口部と深い庇によって開放的かつ自然とつながる空間となり、自然換気によってエネルギー消費を抑えた快適な環境をつくりだす。子どもが主体的に環境と関わり、自然、環境から食農、労働といったテーマを一体に捉えた教育は、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）に代表されるグローバルな取り組みにつながる。活動内容、地域と地理、建築のすべてが高次元で融合した、懐かしくも新しい教育のあり方は、キッズデザインの理念を示すにふさわしいと考え、最優秀賞とした。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
子ども部門

優秀賞［経済産業大臣賞］

ダイヤ ベビーベッドかや

株式会社 ダイヤコーポレーション

受賞理由

近年、デング熱やジカ熱など蚊を媒介とした感染症が問題になっており、世界ではマラリアによって年間40万人以上の乳児が死亡しているとも言われる。子どもは体温が高く発汗も多いため、蚊に刺されやすい。かつてどこの家でも見られた蚊帳は、シンプルながら機能的で、化学物質や機械的機構に頼る必要もない。ベビーベッド専用蚊帳として随所に工夫を凝らし、メッシュ生地は夏のエアコンの冷風が直接当たるのを防ぐ。子どもの安全を守る工夫は、実はこうした日本伝統の知恵の中に潜むことを教える、象徴的な製品である。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
子ども部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

左右非対称構造の ジュニアシンガード

株式会社デサント

受賞理由

子どもの身体特徴を考慮し、内部構造を左右非対称な骨格や筋肉の形状にフィットするように設計したことで安全性や違和感の払しょくに貢献した。頚骨やすねの筋肉の形状調査から導かれた安全製品デザインの好例である。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
子ども部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

litecup（ライトカップ）

株式会社ティーレックス

受賞理由

子どもは汗をかきやすく、身体の水分量も多いため水分補給には留意する必要がある。子育て経験から誕生した、倒してもこぼれず、どこからでも飲める革新的かつ実用的な製品である。夜間の寝室使用での利便性の面でも細かな配慮がある。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
一般部門

優秀賞［経済産業大臣賞］

コトブキの防災ファニチャー

防災ファニチャーによる啓発活動への取り組み

株式会社コトブキ

受賞理由

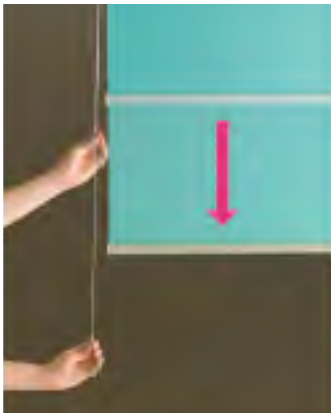
自然災害大国・日本において防災教育やインフラ整備は欠かせないが、有事の際にいかにそれを使いこなすことができるかを意識する機会は意外と少ない。子どもや親子に身近なパブリックスペースである公園や学校を地域の防災拠点として活用するためのハード、ソフトの総合的な提案である。住民同士のつながりを深め、日常的なコミュニケーションを促すワークショップなど、地域の防災教育のスタンダードモデルとなり得る点を高く評価した。

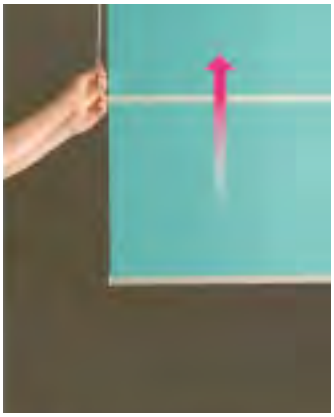
子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
一般部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

ロールスクリーン「ソフィー」スマートコード式

株式会社ニチベイ





受賞理由

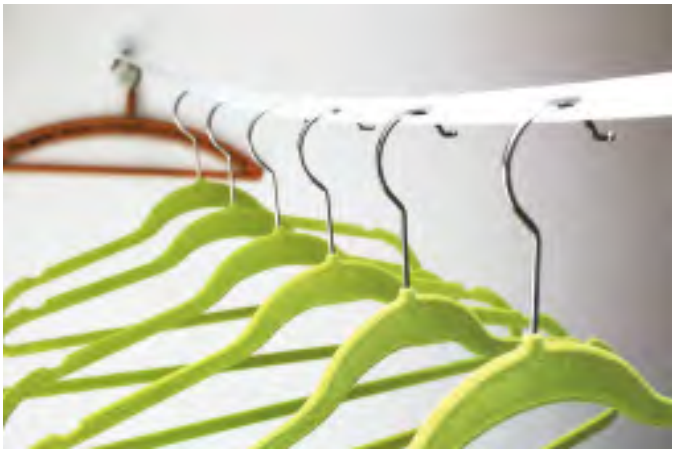
カーテンやブラインド等の操作コードが子どもの首に絡まる事故が報告され対応が急がれている。本製品は、独自機構により、操作性を向上させ、安全で快適な使用を実現した。室内環境と製品の組み合わせによる事故は、子どもの傷害の典型的な特徴であり、他分野においても重要な視点を持つ事例である。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン
一般部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

ブルックリンランドリール

株式会社 TIME&GARDEN



受賞理由

防犯や花粉症などの問題から、洗濯物の部屋干しの傾向が顕著である。一方、室内で床置きの物干しに子どもがぶつかったり、場所をとられたりといった課題も残る。本製品は簡単に後付けでき、耐過重性、抗菌・防カビ加工など、安全性を確保しつつ室内使用に配慮した工夫が好印象である。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
クリエイティブ部門

優秀賞［経済産業大臣賞］

MaBeee（マビー）

ノバルス株式会社

受賞理由

乾電池を本製品に入れ換えるだけで、スマートフォンによる直感的操作で電源のオン・オフや出力の変化ができる独創的な製品。既存の玩具のみならず、自作の乗り物なども自由にコントロールでき、工夫次第で無限の遊び方が引き出せる可能性を秘めている。IoT（Internet of Things）技術が、子どもの創造性や感性を育てる可能性を具体的に示した、卓越したアイデアが光る。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
クリエイティブ部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

f-pzl（エフパズル）
アースカラー 12色セット

株式会社 f-pzl

受賞理由

単一形状の小さな正方形のフェルト片のみのミニマムな素材から、多様な造形を実現できる魅力的な知育玩具である。ベーシックであることが、創造性育成に力を発揮することを示唆している。柔らかな素材ゆえの安全性、豊かなカラーリングも良い。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
クリエイティブ部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

阿久根めぐみこども園

学校法人めぐみ学園
株式会社 日比野設計＋幼児の城

受賞理由

海に近い傾斜地において旧園舎での水害経験も踏まえ、敷地の高低差を活かした空間構成にデザインへの思いがある。2階建て4フロアからなる立体構成を15カ所の仕掛けでつなぐことで、子どもが自発的に動きたくなる回遊空間を創出している。限られた条件内で好奇心や創造性刺激の場をうまく生み出している。

和食給食応援団

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
リテラシー部門

優秀賞［経済産業大臣賞］

和食給食応援団

合同会社五穀豊穣

受賞理由

和食は国際的にも高く評価されている文化であると同時に、地域の一次産業と結びついた経済的・産業的側面を併せ持っている。本取組は、給食という子どもに身近な食の場を活用した和食文化継承への意欲的な試みであり、和食に親しんだ子どもが将来にわたって、和食と地域、産業、文化の関わりに意識を持つ契機となる。子どもが和食に親しみ、献立に留まらない地域や経済との関係を学ぶことで、一次産業の活性化、さらには和食を入り口とした農林水産物の国際競争力強化につながることが期待される。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
リテラシー部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

あそぶだけ！
公園遊具で子どもの体力がグングンのびる！

前橋 明
株式会社講談社
プレイデザインラボ（株式会社ジャクエツ環境事業）

受賞理由

子どもの外遊び時間の減少から、体力低下が問題視されている。本書は幼児の保護者を対象とした、公園遊具を子どもの体力アップに活用するためのヒントが多数収録されている。幼児体育の専門家と遊具メーカーによる独自性ある内容が、公園の遊び方と子どもの体力増進の両立に貢献している。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
リテラシー部門

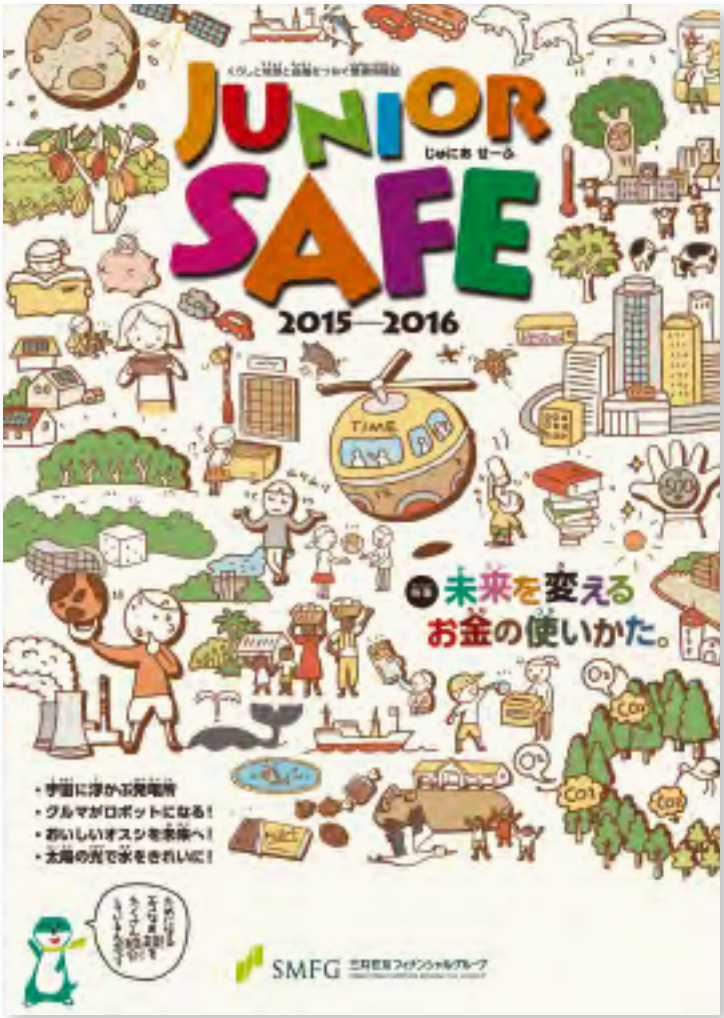
奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

パティシエ エス コヤマ「未来製作所」

株式会社 パティシエ エス コヤマ「未来製作所」

受賞理由

若手従業員を指導する中で、幼少期からのコミュニケーション力育成の必要性を感じたという動機から、本業をテーマに「未来の表現者」を育てる発想にたどり着いた。子どもが自らの体験を親や周囲に伝えたくなる多彩な仕掛けは、それを聞く大人にも気づきを与えてくれるはずである。



子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
消費者育成部門

優秀賞［消費者担当大臣賞］

JUNIOR SAFE（じゅにあせーふ）

株式会社三井住友フィナンシャルグループ

受賞理由

持続可能な消費者市民社会の実現のためには、多様化する消費生活における情報読解力が欠かせない。生産から流通、消費、廃棄へ至るプロセスは、暮らしの中からだけでは見えにくく、幼少期から消費と環境の関係に思いを巡らせる習慣づけが重要である。本冊子では、未来を変えるお金の使い方を考えることにより、一人ひとりの消費行動が持続可能な消費者市民社会や環境を変えうることを、商品の選択方法や情報の読み取り方から丁寧に伝えており、将来子どもたちが自立した消費者となるための消費者リテラシー育成の面から優れたツールであることを評価した。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
消費者育成部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

小学校・商店街・企業が一体となって取り組む「印刷の学校」

凸版印刷株式会社

受賞理由

地域と学校、大手企業の三位一体の取組は、個々の内容の深掘りもさることながら、多様な横展開の可能性を感じさせる。子どもが現実の職業やものづくりを体験することでその意味が深く心に刻まれるはずである。継続的な実施によって内容の進化・深化につながっている点も高く評価できる。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン
消費者育成部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

EduTown あしたね

東京書籍株式会社

受賞理由

自治体や企業が一丸となった支援体制で小中学生が地域の多様な職業を学ぶキャリア教育サイトである。未来の社会や経済を支える子どもたちが社会的にも職業的にも自立することは、消費者教育の面でも重要な視点である。ウェブに留まらず講師派遣による出前授業などリアルな活動への広がりも見てとれる。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
個人・家庭部門

優秀賞［少子化対策担当大臣賞］

孫育て専用ほ乳瓶
「ほほほ ほにゅうびん」

BABA ラボ（シゴトラボ合同会社）

受賞理由

多世代による子育てを象徴する、〝孫育て〟のためのほ乳瓶である。開発元は、100歳まで働けるものづくり工房を標榜する、女性を中心とした高齢者によるグループである。ほ乳瓶を実際に使うシニア世代の安全性に着目した点は独創的で、かつリアリティがある。孫育てという市場開拓と高齢者の雇用の場づくり、子育て支援を同時に満たす、少子高齢化時代における良質なモデルの提案として高く評価した。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
個人・家庭部門
奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

たかが洗濯・されど洗濯
～新家事空間
『スマートランドリー』～

株式会社富士住建

受賞理由

最も時短したい家事が洗濯であるという調査結果から、室内干しの実態、乾きやすい空間条件まで、きめ細かな調査と検証に基づいた提案である。子育て世帯の生活ニーズを先取りし、いちはやく空間機能に落とし込んでいる。明確なメリットを提示できている点が心地よい。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
個人・家庭部門
奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

Child Care Web

シーエイチエス子育て文化研究所有限会社

受賞理由

子ども一人ひとりの特性を認め、個別的援助を行うことは重要だが、実際にはなかなかハードルが高い。本プロジェクトは、個人的に蓄積されてきた知見を「保育のデザイン」に必要なエビデンスとして収集・分析・可視化した意義ある取り組みである。社会への広がりを見据え、さらなるインタフェースの洗練に期待したい。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
地域・社会部門

優秀賞［少子化対策担当大臣賞］

TSURUMI こどもホスピス

一般社団法人こどものホスピスプロジェクト
大成建設株式会社一級建築士事務所

受賞理由

医療の進歩に伴い、難病を持つ子どもを在宅で看護するケースは増加傾向にある。このホスピスはこうした子どもの成長支援とその家族の看護負担軽減のために、緑豊かな立地を利用した6つの家とそれをつなぐ道で構成されたビレッジである。医療、教育、保育の専門家や地域ボランティアが個別のケアプランに基づいて支援を行う。広場は一般にも開放され、一般の子どもと共に遊び、家族同士が日常的に触れ合う地域交流拠点としても機能する。難病を持つ子どもと家族、地域や社会を結びつける、開かれたホスピスとして高く評価した。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
地域・社会部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

子育てに配慮した住宅のガイドライン

東京都都市整備局

受賞理由

子育て世帯に適した住まいの条件や要素について体系的かつ具体的にまとめた事業者向けの指針である。開発・設計に有用なハードの具体的数値のみならず、居住者や地域との円滑なコミュニティづくりに関する事項などソフト面もカバーしており、子育て支援住宅の設計に大いに参考になる。生活者の住宅選びにも活かせるだろう。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
地域・社会部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

流山市 × TaKaSaGo 駅前送迎保育ステーション

千葉県流山市
社会福祉法人高砂福祉会

受賞理由

主要駅前に最長21時まで利用可能な送迎ステーションを開設し、市内34カ所の保育所を送迎バスでつなぐシステムで待機児童数の軽減を実現した。10年という実績もあり、子育てする共働き世帯に優しい街としての認知度向上にも貢献している。他自治体、他地域への波及効果の面も評価した。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
男女共同参画部門

優秀賞［男女共同参画担当大臣賞］

はぐくみプログラム

凸版印刷株式会社
株式会社芸術造形研究所

受賞理由

育児休業における心理的不安を軽減する、多様なプログラム構成を有する取組で、制度的、経済的な対応に偏りがちな「仕事と育児の両立支援」から一歩進んだ、社員目線での制度設計の素晴らしさは評価できる。セミナーやサークルでは育休中の社員やその上司、育休を考えている社員など幅広い層の参画を促し、組織全体で情報の共有を行っている。親子でのアート作品制作による「はぐくみアートサロン」など独自性ある活動もユニークだ。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
男女共同参画部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

ちちしるべ

イキメン研究所

受賞理由

自分たちが育った時代とは、全く異なる父親像が求められる時代であり、子育てへの関わり方に迷い、躊躇する男性も多い。こうした現状を受け止めた当事者たちが、同じ立場の男性たちに「心構え」のヒントを提示している。時代性を映す取組が社会課題と解決策を浮き彫りにしている。

子どもたちを産み育てやすいデザイン
男女共同参画部門

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］

トツキトオカ

アマネファクトリー株式会社

受賞理由

妊娠に対する男性の理解を深め、夫婦のコミュニケーションを促進するというコンセプトは、本部門の主旨に則るものである。子育ての意識の醸成は、母親の妊娠期への理解から始まるという考え方が、夫婦にとっての目標を共有させ、役割分担やパートナーへ思いやりを促すだろう。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン

特別賞［東京都知事賞］

RK-Chair

株式会社アボード

受賞理由

強度を確保しつつ、軽量なフェルト素材を採用した椅子であり、活発な子どもが仮にぶつかってもけがにつながりにくい。素材の柔らかさゆえ、保育園等の床を傷めることもない。子どもを育む環境において有用な製品であり、デザインクオリティも高く、現場での利便性を熟考した企業の開発姿勢に共感する。

特別賞［TEPIA特別賞］

ねじブロック

橋本螺子株式会社

受賞理由

基礎部品である「ねじ」を玩具の主役にすることで、部品から全体へ、全体から部品へという、モノづくりの重要な視点を可視化している点が素晴らしい。身近な製品から宇宙産業に至るまで全産業分野に欠かせないねじの世界をクリエイティビティ高く伝えるアイデアは、機械振興・ものづくり振興を目的とする本賞にふさわしい。

奨励賞［キッズデザイン協議会会長賞］　復興支援部門

MORIUMIUS 森と海と明日へ

MORIUMIUS

受賞理由

東日本大震災から5年が経過し、復興支援のあり方も新たな段階に入りつつある。この地が本来有する豊かな自然、そこで生きる人々の力強さ、経験を子どもたちの生きる力に活かしていこうとする前向きな力強さが、新たな支援のあり方を示唆していると感じる。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

子どもウィッグ『witton（ウィットン）』

株式会社グローウィング

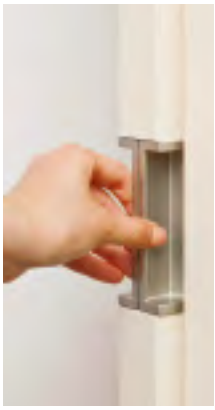
受賞理由

髪を失っても、肌トラブルにより従来のウィッグを着用できなかった子どもたちが、安全かつ快適に使える素材の工夫を施している。子どもたちの気持ちに寄り添い、見た目の自然さを追求した完成度も良い。

子どもたちの安全・安心に貢献するデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

安全配慮引手

積水ハウス株式会社



受賞理由

人間工学的に考えると、ちょっとした形状の工夫でも安全対策が可能であることを示した典型的な製品である。高機能化、高性能化になりがちな製品アプローチに対し、シンプルかつリーズナブルに実現している点を評価する。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

Quut／Cuppi（カッピー）

株式会社 ダッドウェイ

受賞理由

持ち運びやすくコンパクトに収納できるスタイリッシュな形状ながら、様々な遊び方を誘発する構造を有する点が感性の育みという点で重要である。砂場や風呂場、水辺や雪山など様々な場所で長く遊べるよう耐久性にも配慮されている。

子どもたちの創造性と未来を拓くデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

KodoMotto（こどもっと）

パナホーム株式会社／パナソニック株式会社

受賞理由

子どもの自立心の育成をテーマにした住空間提案における多様なアイデアを、PDCAサイクル（PDCA cycle、Plan-Do-Check-Act cycle）を回すように創発する仕組みは新規性がある。生活実態を知ることはキッズデザイン製品開発の重要な入口である。

子どもたちを産み育てやすいデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

kidsly（キッズリー）

株式会社リクルートマーケティングパートナーズ

受賞理由

保育園と保護者のコミュニケーションを深めるためのICTサービスである。大学との共同研究により、実運用前に大規模な実証実験を行い、保育現場の課題と保護者ニーズを満たす、現代ならではの製品と言える。

子どもたちを産み育てやすいデザイン部門　特別賞［審査委員長特別賞］

子育てママをサポートする３ドア冷凍冷蔵庫　CXシリーズ

三菱電機株式会社

受賞理由

子育て世帯の実態に適した中型機にこそ、素材を活かしながら時短できる高機能性が必要、という分析から生まれた冷蔵庫である。食と子育ての接点を、家電メーカーならではのアプローチから具体化した。

第10回キッズデザイン賞総評

キッズデザイン賞は今年で10年目を迎え、応募数も５００点を超えました。
カテゴリー別では、昨年に引き続き、建築・空間の応募数の伸びが目立ちました。
このことからも分かるように、回を重ねるごとに、少子化をはじめ、
社会課題解決の取り組みと結びついた提案が増えています。

「子どもたちの安全・安心に貢献する」ことや「子どもたちの創造性と未来を拓く」こと、
そして「子どもたちを産み、育てやすい」ということなど、本賞の目的に対する理解も深まっているようです。

大人たちは未来を作る子どもたちに希望を託しています。
託された希望がかなえられるためには社会全体で子どもたちが持つ可能性を支え、
育てて行くことが求められます。
キッズデザイン賞はそのための基準を示し、優れた取り組みを顕彰することによってその後押しをしています。

昨年、男女共同参画担当大臣賞が新設されましたが、今年は、東京都知事賞が新設されることとなりました。
本賞の創設10年を機に、これから先も子どもたちを取り巻くものや生活環境からサービスや社会の仕組みまで、
配慮の行き届いたデザインが行き渡るよう、不断の努力を重ねて行く決意を新たにしています。

審査委員長　益田文和